

香港の再輸出と中国貿易

ITI 財別国際貿易マトリックスから

増田 耕太郎 *Kotaro Masuda*

(財)国際貿易投資研究所 研究主幹

中国の貿易拡大と香港を経由する再輸出は不可分の関係にある。香港の再輸出は香港の総輸出額の約 9 割を占め、メキシコ、韓国、台湾の輸出額を上回る。世界貿易額の約 3 % に相当し、世界の中で 11 番目の輸出規模である。

中国商品の輸出窓口として米国などへ出荷する一方、ハイテク部品などを香港経由で出荷し、中国本土における中国の生産を支える部材供給の役割を併せ持っている。

中国貿易は規模の拡大とともに貿易品目の多角化が急速に進み、変化が著しい。“様変わりする日中貿易” 今井：37 ページ参照) のとおりである。

香港経由の再輸出を相手国別にみると、世界 1 の貿易額である品目も少なくない。中国向け IC、コンピュータ部品、それらを含む IT 関連部品、合成繊維および同織物、米国向け音響機器などである。「ITI 財別国際貿易マトリックス」の表をもとに香港の再輸出動向を調べた結果である。

1. 世界貿易における香港再輸出

香港の輸出の 9 割が再輸出

香港輸出における再輸出は約 9 割を占め、香港製の商品輸出は約 1 割

にすぎない。香港の貿易統計は、香港を原産地とする「香港品の輸出」と香港が輸入した外国貨物を香港から出荷する「再輸出」に分け、香港原産の商品輸出と区別している。

2001 年における香港全体の輸出額

は1,912億4,400万ドルで、前年に比べ5.7%減少した。そのうち、再輸出は1,709億6,300万ドルで、前年比4.6%減少した。その結果、香港の輸出全体に占める再輸出額の割合は89.4%である。香港品の輸出は前年に比べ13.8%の減少だから、香港における輸出の落ち込みは香港品の不振が大きかった。2002年1～5月では、再輸出比率はさらに高まり、90.6%と9割を超えた(表1参照)。

世界貿易の約2.8%相当

2001年における香港の再輸出額(1,709.6億ドル)は、世界貿易全体の2.83%に相当する。最近5年間は、2.7～2.9%台で推移している。

香港の再輸出額は世界の中で11番目に位置し、メキシコ、韓国、台湾、シンガポール、スペイン、ロシアなどの輸出額を上回る。

再輸出額に占める機械機器の割合は、ほぼ半分の49.6%である。調査した97年の39.7%から5年連続して上昇している。一方、雑製品と

表1 香港の再輸出額の推移

	97	98	99	2000	2001
輸出額(10億ドル)	188.20	174.88	174.48	202.73	191.24
再輸出額(10億ドル)	160.89	150.28	152.07	179.17	170.96
再輸出比率(%)	85.5	85.9	87.2	88.4	89.4
対世界貿易比(%)	2.91	2.76	2.70	2.83	2.83

(注)再輸出比率は、香港の総輸出額に占める再輸出額の割合(%)。

対世界貿易比は、IMF-IFS掲載の輸出ベースの世界貿易額に対する再輸出額の割合。

(出所)ITI財別国際貿易マトリックス・データベースより作成

表2 主要財別の再輸出額

(単位:10億ドル)

	97	98	99	2000	2001	構成比
再輸出額	160.89	150.28	152.07	179.17	170.96	100.0
機械機器	63.80	62.18	65.72	84.45	84.78	49.6
軽工業品	38.64	34.81	35.09	38.10	34.80	20.4
その他	58.44	53.29	51.27	56.62	51.39	30.1

(注)軽工業品は衣類と雑製品の合計。

(出所)ITI財別国際貿易マトリックス・データベースより作成

衣類の合計は 97 年の 24.0% から連続して低下し、2001 年は 20.4 % である。

香港の再輸出は機械機器が中心で、近年の傾向から 1 ~ 2 年以内には 50 % を超えると見込まれる。

仕向地は中国と米国で約 6 割

2001 年における再輸出（総額）の仕向地は、中国（37.4 %）と米国（21.2 %）の 2 カ国で約 6 割（58.6 %）を占める。さらに、日本（6.3 %）と EU（14.2 %）を加えると 89.1 % で、再輸出先は中国と先進工業国といえる。

集計可能な主要 41 カ国・地域の合計額を便宜的に「世界総額」として、香港の再輸出について仕向け地別に、貿易額がどの程度の順位であるか、あるいはシェアがどの程度であるかを調べてみた。

対中国再輸出額（638 億 6,200 万ドル）は、世界の 2 国間貿易の 6 番目に相当し、ドイツの対米国輸出（595 億 7,300 万ドル）、米国の対日本輸出（574 億 5,200 万ドル）を上回る。

香港の対米国再輸出額（362 億 2,200 万ドル）は、世界の 2 国間貿

易の 20 番目に相当し、韓国の対米輸出（312 億 1,100 万ドル）、日本の対中国輸出（309 億 4,100 万ドル）より大きい。

世界貿易の中で高いシェアを持つ品目は、コンピュータ機器を含む一般機械、集積回路などの電気電子部品、衣類、旅行用具、履物、玩具などの雑製品、スチレンポリマーなどのプラスチック類などである。中国の主力輸出品が、その生産にかかわる関連部材の品目が目立っている（表 3、表 4 参照）。

一方、自動車、自動車部品などの輸送機器、穀物、石油などの鉱物性燃料等の品目の再輸出比率は小さい。前項と反対に、それらの多くは中国の主力輸出品ではなく、そのための原材料でもないものが目立つ。

再輸出額が世界の中で上位にある主な品目を、中国向け、米国向け、日本向けに分けて表 4 にまとめた。

中国向け電子部品輸出は香港経由が主
再輸出額が大きくて対中国向け比率が高い品目は、機械機器である。特に、集積回路（IC）などの電子部品、コンピュータ部品などのエレクトロニクス関連の中間財が目立っている。香港

の中国向け再輸出が 2 国間貿易ランキングの上位を占めている（表 4 参照）。

中国向け機械機器（354 億 4,200 万ドル）は、中国向けの 55.5 % を占める。5 年前（1997 年）は 215 億

1,400 万ドルだったから、5 年間に約 1.6 倍に増えた。その間の 1998 年以降は 4 年連続して増加している。その結果、中国向けの機械機器再輸出は、2 国間貿易の 7 番目に相当し、米国の対日本輸出（291 億

表 3 香港の再輸出額 品目別（2001 年）

	再輸出額（2001）			仕向地別シェア（%）			
	（10 億 \$）	順位	世界比%	中国	米国	日本	EU
再輸出総額	170.96	11	2.83	37.4	21.2	6.3	14.2
機械機器	84.78	13	3.2	41.8	16.7	6.0	13.6
一般機械	21.61	15	2.5	46.4	14.7	5.4	12.9
コンピュータ機器	14.80	11	4.7	42.6	15.2	6.1	13.9
同 部品	10.23	4	7.5	40.0	16.5	6.0	12.7
電気機器	48.44	6	5.7	41.9	17.0	5.5	12.7
映像機器	3.72	4	6.6	23.9	27.8	7.9	17.1
通信機器	5.18	11	3.8	26.9	23.6	2.4	23.1
音響機器	1.05	2	15.8	2.4	44.0	7.7	27.5
半導体等電子部品	11.90	9	4.9	67.0	4.6	1.4	2.7
集積回路	9.51	9	4.9	67.4	4.7	1.1	2.5
電子部品（その他）	15.89	4	9.1	48.2	11.9	7.0	10.1
輸送機器	1.43	30	0.2	50.8	8.5	5.8	9.4
精密機器	13.30	6	6.4	33.0	20.0	8.3	18.5
雑製品	21.98	3	11.4	3.3	49.5	9.5	20.6
衣類	12.82	4	8.8	4.5	26.2	14.5	27.4
鉄鋼	2.66	21	1.5	65.2	16.8	3.3	8.1
ゴム・プラスチック	8.64	10	3.8	59.4	17.1	3.3	8.7
【参考】							
IT 関連機器（最終財）	18.41	11	3.9	31.7	22.1	6.6	19.9
IT 関連機器（部品）	38.01	5	6.9	51.9	10.8	5.0	8.5

（注）順位は香港の再輸出額が相当する国別順位。世界比は世界全体の貿易額に占める割合（%）。ただし、再輸出総額以外の品目は、集計可能な主要 41 カ国を対象に順位を決めた。同様に、41 カ国の合計額を便宜的に品目別の世界貿易額とした。

（出所）ITI 財別国際貿易マトリックス・データベースより作成

表4 香港の再輸出が占める世界シェアと順位（2001年）

(a) 対中国向けの高シェア品目

品目	順位	世界比
総額	6	1.2
機械機器	7	1.3
一般機械	7	1.2
コンピュータ機器	6	2.0
同・部品	1	3.0
電気機器	5	2.4
通信機器	13	1.0
映像機器	10	1.6
半導体等電子部品	1	3.3
電子管・半導体	2	3.5
集積回路	1	3.3
その他	2	4.4
精密機器	5	2.1
鉄鋼	18	0.9
鉄鋼の1次製品	9	1.5
化学品	8	1.2
化学工業品	24	0.7
プラスチック・ゴム	4	2.3
繊維品	5	2.9
合成繊維&同織物	1	5.5
IT関連機器	3	2.5
最終財	13	1.2
部品	1	3.6

(注) 世界主要41カ国の貿易額を便宜的に世界総額とした。世界比は、世界総額に占める香港の国別再輸出額の割合(%)。順位は世界貿易の中の2国間貿易における金額の大きさで決定。

(出所) ITI 財別国際貿易マトリックス・データベースより作成

(b) 対米国向け高シェア品目

品目	順位	世界比
総額	20	0.7
機械機器	32	0.5
コンピュータ機器	26	0.7
同・部品	14	1.2
電気愛機器	14	1.0
通信機器	16	0.9
音響機器	1	7.0
映像機器	9	1.8
その他電気電子部品	13	1.1
精密機器	12	1.3
プラスチック・ゴム	28	0.7
繊維品	10	1.2
衣類	5	2.3
ニットもの	5	2.5
ニット以外のもの	5	2.2
雑製品	2	5.7
IT関連機器	20	0.8
最終財	21	0.9
部品	30	0.7

(c) 対日本向け高シェア品目

品目	順位	世界比
音響機器	12	1.2
映像機器	26	0.5
その他電気電子部品	24	0.6
繊維品	25	0.7
衣類	12	1.3
ニットもの	8	1.8
雑製品	13	1.1

2,000 万ドル)、日本の対中国輸出 (170 億 2,000 万ドル) より大きい。

「IT 関連機器 (部品を含む)」の中国向け再輸出額 (255 億 4,400 万ドル) は、2 国間貿易の 3 番目にあたり、世界の 2.5% のシェアを持つ。IT 関連部品は 197 億 1,600 万ドルで世界の 3.6% を占め、第 1 位である。

「コンピュータ部品」(40 億 920 万ドル) はの 2 国間貿易の 1 位で、世界貿易に占めるシェアは 3.0% である。日本の対米国輸出 (30 億 600 万ドル) の 1.3 倍、米国の対日輸出 (18 億 6,400 万ドル) の 2 倍以上の規模である。

「集積回路」(64 億 800 万ドル) は、2 国間貿易の 1 位でシェアも 3.3% を占める。日本の対米輸出 (31 億 2,300 万ドル)、米国の対日輸出 (32 億 4,700 万ドル) の約 2 倍の規模である。

これらの商品は、一般に航空貨物輸送比率が高い、主な最終財はモデル・チェンジが早いものが多い、世界大のネット取引やロジスティックスが最も発達し、在庫を抑え、商品回転率が大きいなどの特性を持つ。中国の生産拠点に直接輸出し消費する方が合理的で

あるのに、香港経由の再輸出が相当規模である点が特徴だ。

依然として大きい米国向け香港経由の軽工業品輸出

再輸出額が大きく対米国向け比率が高い品目に衣類、雑製品などの非耐久消費財と、音響機器や映像機器などの耐久消費財がある。

「衣類」の 2 国間貿易のうち、香港 米国間は、中国 日本 (114 億 6,800 万ドル) に次ぐ世界第 2 位の 76 億 1,500 万ドル。そのうちの 44% の 33 億 6,000 万ドルが再輸出品である。この額は、中国の対米衣類輸出 (33 億 7,700 万ドル) より大きい。なお、中国 - 香港間は 55 億 4,100 万ドル (4 位) であるので、それらの一部が再輸出として米国に出荷されていると推察できる。

雑製品 (履物、かばん類、玩具など) は、109 億 5,000 万ドルで、中国の対米国輸出 (139 億 4,000 万ドル) に次ぐ第 2 位である。中国の対日輸出 (31 億 3,100 万ドル) の約 3 倍である。

音響機器 (4 億 6,400 万ドル) は 2 国間貿易 1 位、映像機器 (10 億 3,700 万ドル) は 9 位である。

2. 中国の貿易と香港の再輸出

ある国（A国）から別の国（B国）への輸出は、B国のA国からの輸入である。統計上の制約等から、両者の金額は一致しない場合が多い。

中国の貿易額は相手国（例えば米国）との貿易額と比べると、両者には大きな差（「不突合」）があることが知られている。その要因の一つは、香港経由の貿易である。

再輸出統計では、再輸出した貨物の仕向地は分かるが、原産地は明らかでない。中国向けには中国を原産地としない貨物が多く、中国以外の国に出荷する貨物には中国原産の商品が多く含まれているとの推測が成り立つ。

中国と相手国との貿易不突合の要因を香港の再輸出統計から裏付けることは、ある程度可能である。

中国品の第三国輸出が主

香港の再輸出統計には、香港を原産地とする商品は含まれていない。香港に輸入された貨物をそのままのカタチで出荷するか、原産地表示が変わらない程度の変形加工をして出荷するものに限られる。

香港の再輸出は、中国向け（2001年の場合 32.3%）を除き、他市場に出荷される約7割（68.7%）の多くが隣接する中国本土を原産地とする商品であるとみると、中国の輸出額と相手国の輸入額の食い違いをある程度説明できる。

中国から米国への貿易を図解したのが図1である。1999～2001年の3年間の通関額を集計し、平均額で比較している。

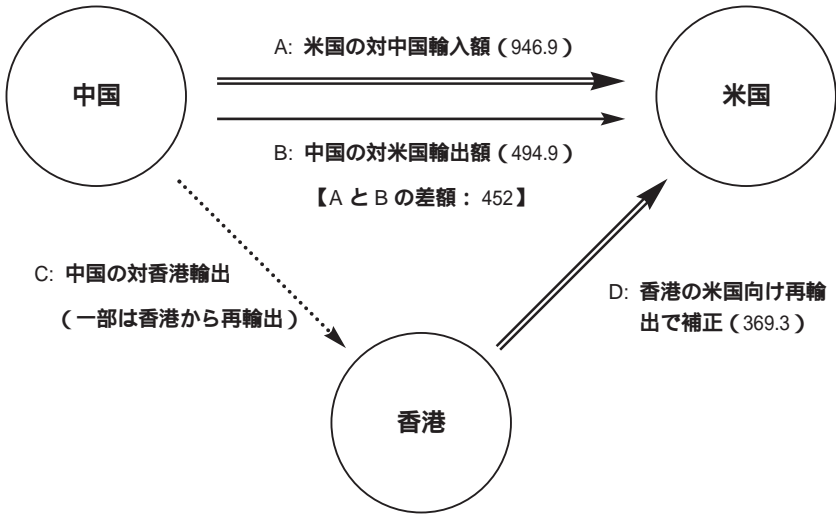
米国の対中国輸入額は946.9億ドル。一方、中国の対米国輸出額は494.9億ドルで、米国の対中国輸入額の52.3%相当である。

香港の対米再輸出額（369.3億ドル）を中国の対米輸出額に加えて補正すると864.2億ドルとなり、米国の対中国輸入額の91.3%に高まる。

個別の品目でも同様の結果が得られる。また、他の国の場合でも同様である（次ページ表参照）。いずれの場合でも香港経由を使うほど自国の対中国輸入額に近似する。

この方法は、香港の国別再輸出額を全額「中国製」とみなし、かつ輸入の価額評価がCIFで輸出の価額評価がFOBであるなどの違いがあることを承知のうえでの比較である。しかし、

図1 香港の再輸出を考慮した中国から米国への輸出



(注) ()内の金額は1999～2001年の年平均通関額(億ドル)
(出所) ITI 財別国際貿易マトリックス・データベースより作成

米国の対中国輸入額の割合

	補正前 (%)	補正後 (%)
総額	52.3	91.3
電気機器	50.4	97.7
IT 関連機器	49.7	89.2
IT 関連部品	38.0	88.4

主要国の「輸入額」を「中国の輸出額」と比べるより「中国の輸出額 + 香港の再輸出額」の方が近似する。このことは、香港の再輸出に中国原産の商品が含まれていること、香港が中国品の輸出窓口として依然として重要な役割を持っていることを示している。

主要国の対中国輸入額の割合

	補正前 (%)	補正後 (%)
米国	52.3	91.3
日本	76.3	95.6
ドイツ	59.0	98.7
オーストラリア	65.6	110.5

中国への出荷拠点としての香港

前項と反対に、中国の輸入額と相手国の輸出額の不適合を中国向けの再輸出統計をもとに説明することができ

る。ただし、中国向けの再輸出額の全額を特定国の原産地にするのは無理があるので、各国ごとの比率を求めて試算する。図2は米国から中国への輸出の場合である。この場合も1999～2001年の平均額を使用した。

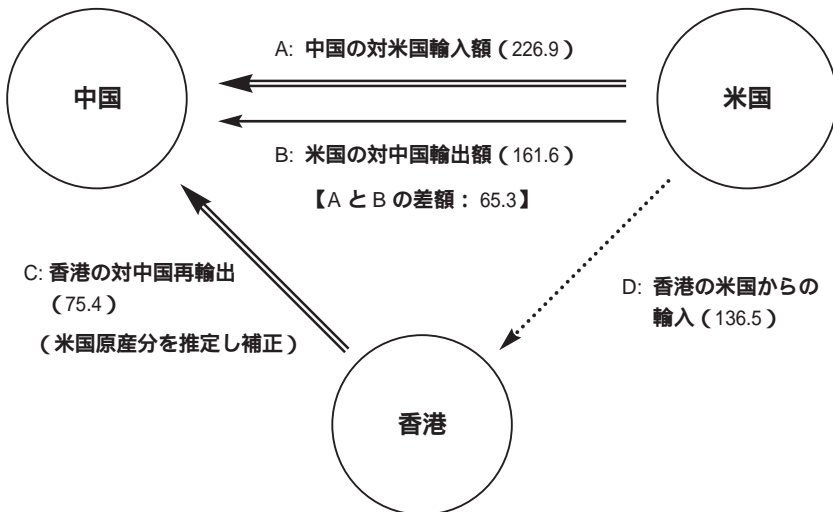
中国の対米国輸入額は226.9億ドルである。一方、米国の対中国輸出額は161.6億ドルであるので、中国の対米国輸入額の71.2%に相当する。香港の対米国輸入額(136.5億ドル)は、香港の総輸入額から中国分を除

いた額の11.8%を占めている。香港の対中国再輸出額(594.5億ドル)の11.8%相当額を米国産品の対中国再輸出額と仮定する。

米国の対中国輸出額と の米国産品の対中国再輸出額(75.4億ドル)を加えた金額は中国の対米国輸入額の101.9%となり、補正後の結果のほう、中国の対米国輸入額に近似する。

このことは、对中国向け輸出に米国原産の商品を相当含むことを裏づけて

図2 香港の再輸出を考慮した米国から中国への輸出



(注)(出所)図1と同じ

いると考えて間違いではない。

総額だけでなく個別品目レベルにおいても、米国以外の国についても同様である（下表参照）。

中国の対国別輸入額の割合

	補正前 (%)	補正後 (%)
米国	71.2	101.9
日本	71.8	103.1
韓国	78.8	103.4
ドイツ	81.1	102.4
マレーシア	59.9	112.4

変わらない中国貿易の重要拠点

香港の再輸出統計からみると、中国向けも中国以外の国向けのいずれも、中国との貿易に深いかかわりがある。再輸出額が少ない分野は鉱物性燃料、穀物、原料品などで、高い品目は機械機器や軽工業品である。このことから、コンテナ船に向けた貨物は香港経由の再輸出をより多く併用し、反対にコンテナ船を使うことが少なく専用船を使う貨物は香港経由の再輸出ルートの方が小さいとの見方もできる。

香港はコンテナ貨物の取扱港として世界最大である。2000年における取扱量は1,810万TEUで、シンガポールを抑えて1位だった。中国の港では上海（6位）、深圳（11位）を大き

く引き離している（表5）。ランキング20位以内には、上海は1991年まで、深圳は1999年まで入っていなかった。中国の輸出入増加が上海、深圳港を上位に引き上げた理由であると同時に、香港が依然として中国へのゲートウェイの地位にあることを示している。

香港でのコンテナ貨物の取扱量が多くても、単なるハブ港として輸送上の積み替え港の役割だけであれば、輸入通関や再輸出の手続きをしないから、再輸出額として統計に計上しない。また、対米輸出の場合でも上海などの港から直接輸送すればよい。

中国の生産品目が非耐久消費財から耐久消費財、資本財、そしてハイテク技術に裏付けされた商品の貿易が中心

表5 コンテナ取扱量ランキング
(2000年)

順位	港湾名	取扱量(万TEU)
1	香港	1,810
2	シンガポール	1,704
3	釜山	754
5	高雄	743
6	上海	561
11	深圳	399
16	東京	296
20	横浜	240

(注) TEU: 20フィートコンテナ換算
(出所) “Containerization International Yearbook”

になるにつれ、それらの生産に必要な中間財の輸入が増えている。一方、最終財ばかりでなく世界の生産拠点としての電気・電子部品類の生産が広がり、中間財の輸出も増えている。そうした世界大の生産ネットワークが形成

されていく中で、香港の再輸出機能は位置づけられていく。その際、長い間培ってきた香港のロジスティックスの良さ、ビジネス・インフラの良さ、優位性を伸ばし続け、生かしきれぬかが問題になる。

《注》

ITI 財別国際貿易マトリックス 2002 年版の作成について

本稿で使用したデータは、国際貿易投資研究所が作成した「ITI 財別国際貿易マトリックス 2002 年版」および「同付属表」に掲載したものを使用している。前年版に比べ 2002 年版は、2001 年の最新時点まで時系列の表を作成する、貿易統計の種類を 34 から 41 カ国・地域に広げる、財別マトリックスの対象品目数を 22 から 46 に増やす。貿易マトリックスの製表に加え「2 国間貿易ランキング表」などの付属表の種類を増やす、などの内容充実を図っている。その結果は、「ITI 財別国際貿易マトリックス 2002

年版」および「同付属表」にとりまとめる予定である。

2002 年版の作成は所内にプロジェクト・チームを編成。全体の取りまとめを増田、中村江里子、貿易マトリックスの表作成を田辺敦子、付属表の作成を原靖子がそれぞれ担当した。各国貿易統計のデータ処理は田辺、原、中尾直美、竹内佐智江、永野成美、鶴見菜花が分担した。

なお、「ITI 財別国際貿易マトリックス」の作成方法は、季刊「ITI 季報」45 号（2001 年 11 月発行）に紹介している。